

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak

LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



13  
1281  
6





1281  
6

千代曩媛七変化物語卷之五

東都

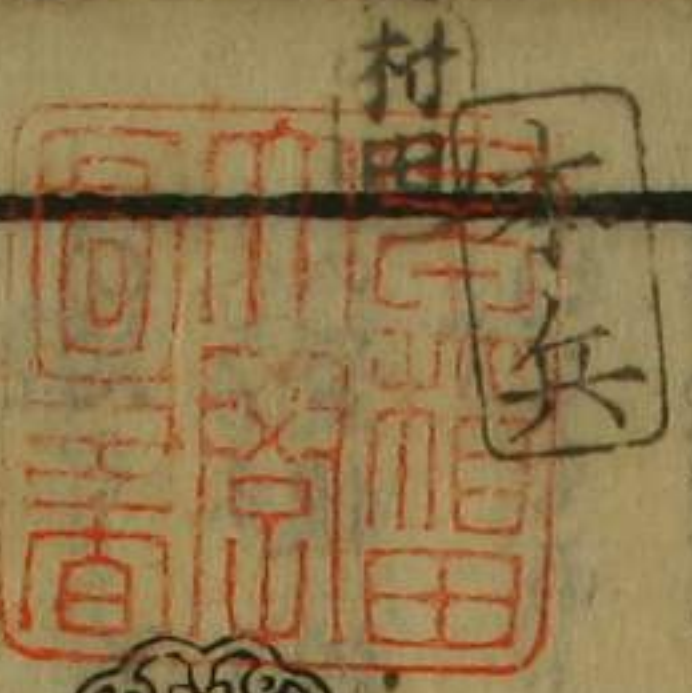
振鷺亭主人

著

千代曩媛再生  
千載蟬蛭報恩



左京勅使さきやうちうしぞうとしのこゝろ声こゝろ不あや駭まき忽然とつぜんと口くちと開ひらえ且かつバらと南柯なんがの一夢いつむあて我家わがやの  
權まゐの裡うち不起あま上あまより四辺よつへ狐きつね又また廻ませは正ただ正ただ是こゝろ夢ゆめ窓まど國くに師し勅しつ宣せんの御使みつかひよりと宣のたまふ  
みぞみ邊へととのの遙とほ々々下くだりりぞぞ教し々々於お敗まりり國くに所ところ勅しつ書しよと捧たげげ宣のたまふふくくのの千ち  
中將ちゆうしやう俊とよ季せき朝あさ臣おみ當あた今いま卿きやうと思おも食く入いれれ勅しつ宣せんあありりせせみみのの信しん々々義ぎ々々  
少すこ抑おさ當あた建た武ぶ三年さんねん六月りくごつ十日じふにち光こう嚴げん院いん太たい上天てん皇かう皇かう祚その御み位ゐ小せう即すなはちち  
時とき今いま南なん北ぺい朝てうと分わかれれども忠ちゆう孝かうの士しと是こゝろと者ものとと善ぜん政せい化か最さいりりとと選せんふ  
當あたりり賞しょう子し依よりり再またひ朝てう廷ていふふ者ものとと若わかくく若わかくく俊とよ就すなはちち中ちゆう俊とよ季せきの御み先せん朝てう





不忠のつゝ聊罪なき旨と聞はれ則思免の論旨とぞ下さまじき頂戴  
 あらまじきと暢ふふぞ大京を躬と浄め服と草て論旨と披録あふふれ  
 ぞ飯洛免許の御書まじき惟忠まじき平伏て忽ふ蓬萊の雲とぬく立地は  
 臺閣の月と攀々る心地うゝもぞ理まじき國所坐と組て宮人偕ふ勅命は  
 蒙一卿の在所と搜らんまじき此國ふ抖箠行脚してなまじきも當鼓も教  
 日淹留一卿の病愈ると待ゆる勅書と進ませはるる貪道素懐と遂畢  
 ぬと喜ひふ人俊季朝臣も其不肖の男とて再任を蒙る事りてよ忠勅  
 の思ぎらんこれ保あがう大徳の執達も憑あうと悦まき青雲の時至り六年  
 の蜚懐一朝も用らる事なほく飯洛の促あううの中も其狂夢もあふぞ  
 幻もあふ立山の地獄と繞る千代曩媛荒妙も相見一車と詰るあふて國  
 師宣ふも夢へ意相情塵の煩惱の變動よりあふ情欲奪競してあふは

一さ所不隨る夢もどとえらるる狂夢と人のまじきともそれ正夢あふ三畏  
 流轉の間六道四生のありまじきとえらるる車と神仏此善巧方便あふまじき  
 立山禪定一罪障懺悔一あふと勸ゆるまじき後季朝臣勅使の一声と承  
 るよの忽ち精神も正まじき三年の宿病日足て平愈るあふは於茲度窓  
 國師と先達と一玉谷真平英忠と信供あふ立山も我禪定一あひたりまじき地獄谷  
 と経廻る以往那辺と看るあふ地獄の体相夢一まじきに違ふ血盆池さして  
 るけ入まじき殊も涙とりのまじき見まじき池の耽鷲地も初る水の色も赤くして  
 かつ紅の血も流り十分も巻と湛る滴まじき事夕陽と侵せまじき紅あの高峯  
 の烟立昇る雲も懸る霞も清く一道の雲氣あり國師天と伴る椅子あふまじき  
 霞もあふも烟もあふも王城も立雲も氣此山もあふも見あふもかのまじき  
 りあふまじきまじき人跡まじき真山の岩根が上の苔庭窟の内と栖と一一個の



女人のつらびちるふ彷徨の髪を荊とまわつ木の葉に衣羽ふまふ山姥と  
 りらんもわくやとこらゆ。風情みく嬰兒と抱傳ふ念々呂々と唱はく乳房を  
 鋪わらうり其傍みい児が毒の什成さうちどらふ又一丈余りの蠅蛭二隻遠  
 いと押さる。疥みく蚊もさうわらふさうりたる形勢あり人々ぬく怪はく  
 近々と進みくわらふ二隻の蠅蛭を駭く聽て池の中へ溺てど沈まうの女人も人を  
 あやしくけくけくさうりやめかや我夫あも坐るさき倚みく俊季見え入る秋こそ  
 かしれまふもさくもさき千代曇媛あまはるもいふあもさうく圓師英忠もさきさき  
 疑ま人く且驚且喜といふさうは俊季躍雀耐じて先り進みかく存令ていあそ  
 けると回みみぞ媛と泪みくさうりあやしくもさき理りやあまのうさきさき曾利あさく  
 か洞ふけくさき結どあさく語り侍さうりそも三年双前此羽木葉の里あさく既産ま  
 臨る眼も君と結あもさき後頼入立山持現と一歩折念さうりもさき目睡有

夢に二隻の蠅蛭枕上ふまふ我々牝牡と立山関關の昔より血盆池に住るまふ  
 るがそのうく立山持現より白山妙理権現へ使者とて参る山越砥波山杖さうりあ  
 て悪夫出忌が手小階と活るう牝牡土中不癒と薬が若小煙教さうりあさき身を  
 ば躬の慈悲ふよりて一命救救さうりその眼も貴教とさうりあさきあさきあさき  
 ふ妻作さうり法躬不調かさうりあさきあさき今荒妙法躬を失人と来る早く東ま  
 してあさき我千載劫経る通力自在と現現取さうり荒妙を誘さうりあさき疑が  
 ちうさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさき  
 宿直袋とら背不撥負重き後以抱つ東とさきあさきあさきあさきあさきあさきあさき  
 も律雪ふあさきあさき山々刀林の枝ふあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさき  
 ちひ八重地獄の有さあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさき  
 雪派ふ吹倒さきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさきあさき  
 紅蓮の吹ふとち

千代巻抄物語

卷之五

二







王谷真平  
 小女膳か  
 頭取撃つ  
 子代暴発の屋敷代  
 出邑震平里の依子  
 何れも呵責川知ふ  
 何れも他童等見懲め

十代  
 王谷真平  
 物語



從是立山地獄道

仁義物語

卷之五

四



さうらうらう此捷徑いしむ新まきその詞乃下ふ忽然とくくの二隻は蟻地の中  
より踊あがり彼方お致出此方と才更見え頂とくく揚く動静より幾は其か  
とさうらうこれぞ御守るまうらうとやいそせまて着直装と背負ひ上のことと次  
け不折く、甲斐々よく物ば俊まふ若君と擁抱さ圓所ハ杖お倚つ、蟻地おゆ、小  
随急さ山奥さしてそ落あひたり英ちと跡お踏さまり居るが案のどく色  
武方身は勢引率しく装束まてとえより士卒等真平を取圍さも働バ  
新取んと旅とほ構え、時兼喚ていそく當入の勅免あは中お殿ハ力あく  
定平終后ハの中澤千代義援北津首と場らん真平のあつと詰くけく道は江也  
の持場の雄勢子の圍いどくより英忠梅行の葉武者ども斬まきりつべりしと  
そくくして响とらうらう参せんものごと思索しんぞ只せひもやとらうら  
主君と失ひ奉らうらうとバ津覚悟の程も告まのせ完期の念ととらうら

為西の河原北地藏堂まく討まらん臨時ゆきまびてよとりの時兼鎧兼一  
賤山賤の女あもあどど下ふ討まのりも情さくさく某山下の庄官が  
家お待りけく晚鐘と暗嵩は地持堂お到るべく時刻と悔る事うくれと  
いふて則士卒とむさい木山下とじて下りたりと元来真平只响と伸るる為  
のさく一旦時兼とん欺さとも他は良人壽もたなく浪々として地持堂の後お出  
しから、小石の地持さる叢の中は六伴立ちあり此石地持の頭六つが打落と  
其跡お生頸六つまうらうぞあけあり近くよりさ見え六つがうらうらうら  
て菰子髪やう角の男童あり何ハ髷首蜻蛉髪的女童あり不首血は塗さ  
いと母いりいられれば十戈より下の稚児とやうも素首お割癒そさあそれ  
親々の悲想やそれと只菅哀を催ふのさか吃とさひあやう倅るは  
うみ此首級ともく時兼と欺なやと雨つどく見えよみは是里の子草菰童







仏と如よとて花才と高千小子拾りけ其間一夏わたり隔る左右の石地は  
 捨つ山唄くくひはくをよる様もねえ才の左右は隔拂らとけよく打まて  
 形もつかつて息と曳々絶えたり小女膳より中へつづき中へ築き郎よ我も此  
 らど山よ露と射は霞とくやけ足翠の隅も姉又助旁とてを波くかく  
 のふとくわくくの狐邪見の呵責は打まてく何とくもべさるる人瘦りたり  
 ちも散あてさざりかいつてもさつらんどのうらやけいふとくもたれが築き郎のま  
 我とすらうもいさう後と姉弟背はとあひま歌は傳らと討まてそれ悲  
 らよまの呵責の鬼は責らまてくもむもあなを今もさやく老妣のあらも所へ  
 伴ひてまてまてあまのふちくもふあ人種も八万地獄の底よりとも尋ゆてや  
 あるがまそとを拵く悲しううく回と擡つ中よ此所ゆり一かよ心をたれ  
 憲とあひて亡者よあてをさびつとまうた地持井と懸まふめいごもあすも

又母のこゝ夢まがろくももえくもえん和讃を唱やうとひふを築き郎も候  
 まうたえ身いつひるまき声とあつても飯命頂礼立山の海の河原の地持早  
 よらうちのもさな子が小石を集く塔まて一重はくても又の巻二重つても  
 巻二重はくても兄弟は我身の巻をつむとくハ呵責の鬼かわけ来て組まて石と踏  
 らう人母哀しく泣きまてその時結化地持まてそれちやく安婆あり冥  
 邊のまてまてまてと衣の袖へまてまて南無阿弥陀仏と唱へると築き郎  
 とまふらうも息とさう頂まてねまてかかて倒伏あり小女膳らとをえん  
 築き郎とくも喚び叫びまてそれまてそれまてそれまてそれまてそれまて  
 繫一帯は曳ひまて身と回つ中よ人築き郎よ姉もまてまて下と就まて石地  
 持の蓮臺に於て敷くまて死まて身構まて地持堂の内は声あつてまてまて  
 とりつても真平もまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて







玉谷英忠が灵薬  
築木郎小訥  
大子怪力と揮ふ



地藏

何訶訶尾沙婆摩曳莎奇

苦生



經曰 内外現世萬德圓滿之效果而六道垂化  
地分證之勝因而十方分身





如く時しも返照の鐘隆々と響き、曩莫地并薩埵一どりも功カあり未  
 仏果よのうとよと閃くち刀とゆゆとふ首へ前あぞ落すも活アし小時  
 山と登りて来まぶ玉谷忙しく質と片影不懸し時刻たがむと干代曩爰の市  
 曾と場ゆらと棒と時兼へ出邑やあるとよふ小出邑とよふ小出邑の親よつと  
 出れば玉言の頃哉と鐔奉と推耳げ堅塗を登るふ久し小出邑首級をうらぐ檢ゆ  
 閑道と潛来て首討ゆる夢動ぬ規し不相遠ゆさる首と申せ時兼諾し首  
 箱と携へ竟山とぞ下り玉谷へ出邑のう在るとんよる昔時の怨怒  
 せらまら此時しが勝負と決せよと踴あがりて怒とるを備開ゆるか兄人と腰刀と投  
 せり玉言が前よ言と坐し天罪入罪因果廻り小車の今ぞ我身は知り且てり幻  
 よう造惡の罪とつし人と斬害せし事米さく算つるよ迫あし秘今此際は何と  
 りもん一生の罪惡悉く懺悔し畢ぬりまらむとよしよるもやう傍の岩尖は頭

と打はけ腦を碎と死らうくれは生色もさしりふ紫よやと感どりこれ玉谷生色  
 善と惡とと経緯し其終人々も勝災世ハ此因縁とも知り且てりふ哀とぞ也  
 八公梁太郎が身のうらう毒草を摘てぬるあり姉はらぐらふあんとぞとあろく  
 立ちよふあを姉はらうと英忠うえさる質とんよるも中よ誰首とら敵はらぐ  
 列らひて亡骸と押らとじ声と限らふ哭らぬの理アもさるも懺悔らりえらあも  
 たあふ心と真平我らと姉の敵とと築ちらふ刀次持せらるるを持えと我たろ  
 小服は実立妻平の服引廻せやうと姉の敵とあじとふ築太郎と膝の上は檢  
 抱髪搔きくふんは者や我らとと類稀る老者の姉と討ゆる者なればそのを  
 ととと討ゆるとよ約と遠く生色らと驚きとと姉が末期の一寸公亮は刺は  
 より你と我子とさく二代の忠はまじめんゆとく我忠まは血脉と係は後身  
 猛の塊魂と傳しとんといはくも勝城と執出らとその血と築太郎は不滾々漣



叫あびいといくく作なれな英志も又終つふとこれを覆り伏せ不倒しあれ惜べき武士といふ  
 落るどろ為ふ又時兼が士卒箴々とま本を姫の首を傷し玉谷といふ  
 築き身まろくと起て四方を睥せ其勢完拔君羊の勇士とぞ見て一方を挽  
 一さらりびぞ討とと搦されよと圓あぞ吐者又見といふ子側あつる尺角乃  
 卒塔婆と杜抽てさろと膊くとま士卒釜頭を執て曳きまと巻き勢あつ一方を挽  
 々るふ一人の童は勝うとく引倒さし一舟不繫と大地は打坐と羅うけは地置て  
 十余人と一撃ふ蓋粉ふろろ夫あろろ殊る士卒等を捲きと直時雨道て  
 ゆく築き身が銳正の秋雲の山と如くあく立わる雲の跡も霧立の如く  
 槩の葉は玉谷が亡灵烟の如くあつられて親の如くみ隨ひゆくぞ不思後ろろ次才  
 ありかる取勢と地持堂の内は見ゆけ出邑二人咳くりと是と思ふ亡灵家  
 これれも我幻術の形と現れ死せると見せる玉谷を欺き終ふ如く殺つる

公地よるよる主言が首と搔矯髻と懸く授げ我を東國ふ赴き錦衣殿と  
 討く又時行が神羅の妄執とく子ぶ時到ぬあく上病と一サと思ふいゆいゆ  
 わらき機勢ろろり○却説夢窓圓師俊季朝臣千代曩媛立山の捷路と下  
 てあひ越の高濱より東國ふゆく賈舩を便舩一追風よりく纜と解く滄溟  
 激々満々とて涯もあく北の方遙み佐渡の寫見つくを舟の人親知くす  
 子知く舟の沖と乗々ふ須更風吹り再々不烈く吹まき逆浪天は漲りて  
 て白雲ふふとく洶々と打波の音は泰山の崩れといふ舟中は如色を  
 失つて圓師詠りある昔時親鸞上人越路を配流の時山浪打際ろ荒荒  
 波小捲まりと危うしふ金色の大龍波の上は忽然と出現し逆浪と遮て聖人  
 焦ろろしと傳へが聖者權者あらる例もあらる只眼を塞ぎ觀念して  
 ぞ坐を然るみ風よく暮る波まとく荒く船と搖あげ揺あらし激まき旋る



宋良海子頭魚殺



个身如坐言

卷之三

十一

大正...

...

...



此船顛て大洋の藻屑ふるりてのりあり時より巨漣のりて水面より  
 ころはく事此大ゆめり此波中より打ちくひはく浪のりて  
 もたまりし後衆皆入に池つきてえまほ若君のりて浪よりれて失く後  
 幸と姫のりて嘆きくむむりその時夫婦の悲歎言方及所筆端より  
 得ぶさあはくぞくして詮も方もなれば又船とさすふ海上よりをん  
 凡林君余もあはくんと見ゆ魚の死するが浪のりてあり船子ども  
 まろく船より揚ぐはくを挺頭魚とりよりのりて鼻の前より芥のりて  
 骨ありて船と撃壊る大毒魚あり行者もや撃まき腹の堅る三尺りて  
 て死するありる腹中より児の細紳頑笛再鼓出みれば十代叢媛の目  
 ころも是覚ある若君の付るもろく推此魚の吞まはくよとて魚のりて

子の歌よりわいのりかやうの被取魚と贈て泣きいで撃をの狂もくぞ  
 見入る國師俊季ふ討せむいむり池大納言とや入佐渡の島へを遷れ  
 時此海より定遊の二子と大浪の着ふ失ひむいり親知をむ子ありその名  
 ありとより昔も今も哀その例もかくやとてあはくもあはくもあはくも  
 生らとていりある親知と子ありすあはく論一は入俊季朝臣心言下  
 不悟聞く是より悟道ふ入ふとありわけて船載後の出雲寄つてまき  
 の仲より巨漣は波の間を浮つ沈り泳るものあり是行めのぞまれば薬を  
 あり花子子浪をさりあはく若君とさあはく魚の遊るもくわくわく  
 舳ふ跳あまほ若君の母君とえく乳をよくとりて葡萄倚ふその時又  
 喜前愁の比はくはくまきまきんはくもまきまきまきまきまきまき  
 が一子あるま平城名宗先立山まき真平美よとて今と頭く小女贈媛のり

十代叢媛物語

巻之五

三



の得成然  
圖脱佛灵

荒妙分七灵



中物俊季朝臣

出邑林行

至谷太良



用堂尼

十代景媛

夢家田師

千代景媛

夢家田師

四



代々忠不死し其身も亦玉谷が精血と受継ぎよりあまら御後の慕い  
 ちや御船出し久追舟やぐく海上と泳ぐ所不徒以魚若君と一呑ふり  
 と腕と截り助け奉りさうさうの次方ありと詳ある其言語さも玉谷小  
 似と礼と正しく暢ふり人を愕然とすといふ事ありこれ偏ふ人間業  
 あらと刺小児の爲俸や大勇猛の所為あり事今く玉谷が忠義の性灵傳  
 神とら流るらんとも中御殿二代に臣と得たりと喜みひ直玉谷を  
 俊英と姓名と賜りやうてその夜も拍寄ふ泊船し浪静なる朝風不波路を  
 りさめめある縁金さうさうと赴む



千代曩媛投機和歌  
 夢窓圓師解脱荒妙

そもく後醍醐天皇の公主用堂禪尼と申奉る内親王うらむと  
 こらよりあらく禪法不歸へ大智見性の徳と成就し女誠不世に唯遺尼成甫之  
 後不相州鎌倉松岡の東慶寺身立の和尚とありせむは是よりされば所又上皇  
 芳野に潜幸なりせむは後へのよき世間の厭べき言公悟道發明し  
 京都へ便宜耳喧と縁金さうさう下り電谷の片境に取のてくれ巻と結ひ寂莫と  
 紫のたもと固閑く人の尋らぬ防ぎ行澄てをいませり  
 以所さうさうに夢窓圓師後季朝臣千代曩媛北越と経る縁金さうさう着あひ  
 とくく久しと對面あり往昔天竺神通川あり千代曩媛の前生と云ふ  
 日本に神通川あり宿業の罪障と果畢ゆる事因果歴然に理と暗く地獄の  
 誓ひありやう夫婦結髪ゆるの貞操と事とて世に事ありハ二十余年の夢  
 て各々むうと恐ひむひたりたりとて右則法向に弘明し夢禪觀法と修  
 日とどさるるが巖畔花の匂幽き後園の昔の色も同くは深淵の月あり





竹島好楽言

卷五







瀧へは流るる水に載せしき諸君の井のゆゑは立せし夜もては参禅しよの勝方  
 と分つがごとくして秋の如くやばりて國師と禪尼の堂上は香風林火如意を持  
 て坐しよひ夫春の花へ上求本末の指のありて秋の月へ下化逆暗の水にやる  
 法鶴等忘想を離さむと法をてその國師は水想と観せむ直鏡紅蓮大紅蓮  
 うりとも般若の知火を消せむ一焦焚大焦焚うりとも法を少の勝ご一正は豁然  
 とて大悟の曉ふ至るごとく示しよふうて又今宵非老のそとて王谷太師俊  
 英真善哉卷の上は大笑大口笑ふ著成る角は髪結く紫下濃の誓ふりて  
 大さ刀派よて之縁端を待てるも今宵は十五夜の月清光と照るる二人の  
 姫の庭の面を井のゆゑは立つて一やうく時うりて夜も五更又坐さんう火惱れ雲  
 をひてふされ一真如の月の影を觀念の嵐もどくもかむすもるもりふ  
 俄は二乃木の黒雲をゆりてさるる虚空は玉谷が声あつてさるるやとふは衆を即令が

你在母の仇色狐受とて中と喚びか躬侍寸をふ引裂てぞ庭上は鼓と扱とせん  
 を即へはさるるや流るると勇ふ勇うる各々生色は因果の端ありと玉谷が神霊の嵐ふ  
 ると嗚呼と感とるむりり此時千代叢媛の惘然とて睡を信せむ此の音もど  
 ろもく、堂へお聞加桶とてあはしきまどとてと桶をけけ水とりを川と爰  
 醒てゆりてさるる一首の歌とたうかふ詠トあけり  
 免は角に載く桶の底をて水たさるる桶は月も中もどく波  
 りま一人の媛へ勇猛あしと睡らざれば桶もあつと裁つむと一首は聆そり利  
 賤女がゆりてく桶は底をけくひて身よかか教有明の月  
 と泳どる時は國師背後より大喝一聲とて如きは以擊をまは散れ消し失せり法  
 としく俊季のふねひさあし怖し荒妙が姿殺うりもあつて我と引とるるや  
 と叫ぶぞ其時國師水精の念珠を揮うて抑今現る思霊をとりてさるる教あつと

一七







子判下！紅顔と黒味とありてかろく受戒しむ法諱とバ如夫と号し名は天下小  
 彰一音の和奇が末代は傳へりかくて如大尼ハ用堂禪尼と号しともは鎌倉より行  
 ずはくはしは後季教は若君と伴く飯洛あり若君ふ兄公宗卿の家叔と成と  
 此御見朝は仕く北山殿の跡と継ぎ北山の右大将實俊々々れり  
 後季朝臣ふ兄の家名は再び真一をとりぬとて其刃の仕と致く閑居まりく  
 塵と遊蕩と脱と聖切くおせしむ世人北山の優婆塞と号奉し此人なり  
 此時足利の代となりて海内一統は治り千秋乃露れ声ハ五岳の嶺ふひけり万葉  
 の龜海中より涌せし蓬萊とみ現せしとより多岐末ともなりし

千代曩媛物語卷之五總畢矣本兵

千代曩尼本傳

○都テ千代曩ノ車蹟具ニ識セル書世間ニ希ナリ偶鎌倉志ニ海藏寺  
 底脱井ノ條下ニ出セリ○曰底脱井總門ノ外右手ノ方ニアリ相傳フ  
 昔シ上杉家ノ尼參禪シテ此井ノ水ヲ汲テ投機ス歌アリ  
 賤女力載ク桶ノ底ステヒタ身ニカ、ル有明ノ月  
 編者ノ按ニ曰城ノ陸奥守平泰盛ガ女金澤越後守顯時ガ室トナル  
 後ニ比丘尼トナリ無著ト號ス法名如大ト云佛光禪師ニ參シテ悟徹ス投  
 機ノ和歌アリ

千代ノウガ載ク桶ノ底ステ水タマラ子ハ月モヤドラズ

ト云此底脱井ノ車無著ガヲ錯リ傳へタルカ上杉家ノ尼何人ト云リ  
 ヲ知ラズ鎌倉志 ○一書ノ説ニ云千代曩ハ何人不識言初紀問夢窓國



師招機未會一時湛水於桶以載之頭上登于屋上嘯月座禪  
則心心無念念念無念凝念於金顏以澱淚於西嶺之月恬然工夫  
一朝脫水桶之底渾身灌水廓然如夢忽醒洞豁當下大悟成就  
暨投機

免三角ニタクミシ桶ノ底ヌケテ水タマラ子ハ月モヤドラズ

○今此書ニ見合スルニ哥ノテニ方ハ大同小遠アリイヅレヲ是ナルカシラス  
今俗ニ傳ヘテ口稱スル初五文字ニ千代ノウトヨメルハ訛テ云慣セルカト哥  
ハノ唯モアリ○私ニ按ズルニ千代ノウ夢窓國師ヲ導師トシ後一錄  
倉松岡禪尼寺ニ入テ蘊染トナレリ往々雜書ニ見ヘタリ時代ヲ考ルニ此禪  
尼寺ハ東慶寺ナルニ然ラバ身五世ノ和尚用堂ト時ヲ同セルモノ歟用堂禪尼ハ  
ノ御女ナリ應永三年丙子八月ニ示寂ナリ此ハ是雜書ヲ引用ルニアラザレバ口碑ノ勅スル

トコロ誣ベカラザルヤヤ○嗟夫悟道禪師三國ニ其算ヲ知ラズトイヘ氏  
婦女ノ身ニ居シテ釋尊ノ時大愛道女提婆女月上女達摩時摠持女馬  
祖ノ時麗波靈昭女臺山婆子實際女本朝ニオイトハ檀林皇后千代曩ミ  
ナリ唯一音ノ和歌アツテ後世ニ能聲卓然タルヲ稱シツヘシ投機ノ  
事ヲ言ニハ誰ヨク其徹底ヲ觀知ラレ吊モ亦尼公ノ志ヲ傷ヘルニ  
似タレドモ只高踏ヲ尚テ權ニ其名譽ヲ擧ルモノト見ルベシ  
○此書元來見女子ノ玩具ニ備ニ爲ニ述作スレバ強テ正史實錄ニ考  
索スルニアラズ蓋モ亦真アラシ爲ニ画ガキタレバ頗ル虚事ヲカラノ只  
儂キ夢物語ノ例ニテ見ルベシ他日本傳ヲ得テ補ベシト云

振鷺亭負居 識



代長後句



振鷺亭主人著述書目

書肆各々梓行

妹背山緒環策子

前篇五册  
近刊

全部十卷

春徳磨誓車

追刊

全部五册

茅蜩物語

追刊

全部四册

淨藏貴所神通傳

前篇五册  
追刊

全部六册

坂東順禮女敵討

全四册

鯉魚箱根地獄

全二册

三庄大夫  
事蹟考粟子小鳥

全五册

奇譚八幡不知森

全二册

夏祭水滸傳

全五册

伊勢與日向物語

全二册

右戊辰年間脱稿令發鬻者也

嘉永七甲寅歲子孟春

江戸 小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

同 京橋彌左衛門町

大嶋屋傳右衛門

同 馬喰町二丁目

菊屋幸三郎

京都 三条通寺町裏

丸屋善兵衛

同 二条通堀川

越後屋治兵衛

同 寺町五条上

山城屋佐兵衛

同 三条通御幸町

吉野屋仁兵衛

大阪心齋橋南久太郎町

秋田屋市兵衛

書林

三都



